

(道徳)

道徳科の評価はこうすればできる
～ 1 時間で達成可能な具体的なねらいと評価文～

大阪市立豊仁小学校 研究部

1. 研究主題設定の理由

平成 27 年 3 月に一部改正された学習指導要領では、「特別の教科 道徳(道徳科)」の評価について、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価することが示された。また、「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の報告(平成 28 年 7 月 22 日)では、道徳科の評価についても示された。

ところが、児童の学習の何をどのように評価し、指導要録や通知票にどのように記述するのかについては課題も多く、関心の高いところである。そこで本校では、「特別の教科 道徳」の実施に向けて、評価について研究を進めることにした。

2. 研究の趣旨

「特別の教科 道徳」における評価に関しては、児童の道徳性を評価することはできないという前提に立つ。その上で、1 時間の道徳科の学習における児童の学び・成長を評価することにした。つまり、1 時間の学習のねらいが達成できたかどうかの視点で評価を行うのである。そのためには、1 時間のねらいは、抽象的な道徳的価値やそれを文章にした内容項目ではなく、その授業で扱う資料の特質を生かした具体的なものでなければならない。内容項目は授業づくりの窓口ではあるが、そのままでは大きすぎるため、1 時間で達成可能なねらいを立てなければ、児童の達成状況を評価することはできない。これは各教科と同様である。また、授業である以上、児童が学習前から分かっていることをねらいとするのではなく、児童にとっての新しい学びを想定してねらいを立てなければならない。つまり、道徳の時間を 1 時間実施したからには、その成果がたとえわずかでも、児童にとって何らかの学びや成長があるはずであるという考え方に立ち、その学びや成長を具体的に表したねらいを立てるのである。

したがって、同じ内容項目であっても学年や資料が変われば、ねらいも変わらなければならない。

3. 研究の概要

(1) 評価はねらいの達成によって行う

道徳の時間を評価するには、より客観的で明確な基準が必要であると考えた。道徳の時間を評価する基準として、これだけは外してはならないものを 1 つだけ挙げるとすれば、それはやはり「ねらいの達成」だと考えた。つまり、その授業で教師がねらいとしたことが、学習指導によって達成できたかどうか、指導と評価の一体化に立って児童の成長を把握しようということである。

(2) 1 時間で達成可能な具体的なねらいの設定

一般的な道徳の時間のねらいは、例えば「うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活しようとする心情を育てる。」や「相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする態度を養う。」のように、学習指導要領に示された内容に書かれている文章の末に「心情」「態度」「判断力」などの道徳性の諸様相を付けただけのものが多い。しかし、このようなねらいは抽象的で、児童

がどの程度達成できたのかを評価するための基準としては大きすぎると考えた。

各教科においても教科の目標や学年の目標・内容があるが、それをそのまま単元や1時間の目標にはしないはずである。つまり、「特別の教科 道徳」においても授業のねらいや内容に照らして児童の評価を行うには1時間で達成可能な具体的なねらいを立てる必要があると考えた。

(3) 特別支援教育における道徳授業と評価

本校の特別支援教育における道徳の時間では、『特別支援学校 小学部・中学部学習指導要領』（平成21年3月 文部科学省）第3章 道徳の内容を受けて、児童一人一人の学習上の困難さを考慮しつつ、どの子にもより確かな学習を保障するために、次の4つのタイプに分けて授業を行った。

- タイプA 通常学級において他の児童と同じねらいに向けて一緒に学習する。
- タイプB 通常学級において他の児童と共に同じねらいで学習するが、補助者が個人に支援を行う。
- タイプC 特別支援学級教室において個別または少人数で学習するが、教材、ねらいは同学年の児童と同じである。
- タイプD 特別支援教室にて個別に学習する。ねらいや教材は学習指導要領に基づいて独自に設定する。

そして、特別支援学級の道徳授業においても、1時間のねらいの達成によって学びや成長を評価することには変わりはないが、評価に際しても、児童一人一人の学習上の困難さに配慮し、適切な支援を行う必要がある。

例えば、文字や文章を書くことに困難さがある児童については、「今日の学習で分かったこと」を道徳ノートに書かせる際に、教師が聞きとりを行ったり、対話を通して引き出したりするという支援を行った。

また、言語による理解や表現が困難な児童に関しては、教師が活動の様子や表情を観察することを通して、評価の材料を集めることとした。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- ねらいに迫るための発問の工夫が必要であり、それに基づいた補助発問も用意する大切さがより明確となった。
- 1時間で達成できる具体的なねらいを設定することで、児童の学習状況を把握し、そのねらいに向けて、児童が何を学んだのかを評価できることが明らかになった。
- 児童が道徳ノートに書いた「分かったこと」を資料として、評価文を作成することができた。

(2) 今後の課題

- 1時間で達成可能な具体的なねらいの設定と、それに迫るための効果的な発問を構成すること。
- 児童が道徳ノートに「分かったこと」をきちんと表現できるように、指導の工夫をすること。